

「副作用研究会の活動と参加者アンケートから見た有用性」

発表者：中西 昭人

【はじめに】

高齢者は多剤併用、長期服用など副作用の発現頻度が高いことは容易に想像できるが、重篤度に関わらず副作用を経験する機会は少なく知識も十分ではない。副作用を理論的、体系的に学ぶ必要性を感じ、副作用研究会を立ち上げた。得た知識を生かす対話力なども重要であるため、少人数による検討（SGD）を採用している。薬剤師による「副作用のマネジメント」、つまり、発生している/発生するであろう副作用の解決・予防に共同で取り組み、専門性を発揮することで、患者の安心・安全を確保でき、深い信頼を得ることができる。月に1回の定例会は愛寿会同仁病院で開催しているが、参加が難しい施設のために、出張研究会も検討しているので、興味のある方はご一報いただきたい。今回、研究会の参加者を対象にアンケートを実施したので、結果を報告する。

【方法】

研究会へ初めて出席した参加者を対象にアンケートを配布し、実施前と実施後に記入を依頼した。

【結果】

属性は20～30代の製薬企業、病院薬剤師が中心である。職種を問わず意見交換が可能であるため、保険薬局の参加によりさらなる充実が期待できる。全体的な感想として、やや難しいとの回答が多いが、疑問を持つことがディスカッションへの参加を促し、他の意見に興味を持つことができるため、適切なレベルと考えている。自己評価では、良い、大変よいが多くを占める一方、理解度の低い参加者のためのフォローアップが必要である。副作用に対する視点では、変わったが約7割を占め、「予知できる範囲であれば副作用は安全」などの意見が寄せられた。副作用が向いている職種として、研究会実施後には薬剤師が多くを占め、「積極的に副作用に取り組みたい」、「薬剤師の仕事」という意識の向上が見られた。得られた知識として、「副作用の早期発見のポイント」、「服薬指導」が上位にあり、現場に役立つ研究会と言える。研究会を有意義に感じる参加者が多く、「様々な意見の収集と知識の向上」、「視点が変わる」などの意見が寄せられた。

【考察】

当研究会では副作用に対する知識や意識の向上、他者との連携を築くなど、研修としての役割も果たす。SGDでコミュニケーション能力を磨き、副作用対策の中心的存在として、チームや地域医療の中で活躍できる。今後は各地域での同様の取り組みを支援し、すそ野が広がることに期待したい。